

AOYAMA OMOTESANDO

特集3

デザインする街—2

街の変貌〈青山・表参道〉

明治神宮の表参道としてケヤキ並木が続く静かな街は、今や1日6万人を越える来街者で賑わう街に変わった。この変貌ぶりは、自然発生的に出来上がった結果なのか、あるいは仕掛けられた街なのか。

“デザインする街”は、急激に変貌した“青山・表参道”の街づくりの今である。

ファッション・ストリートを支える 先人たちの都市の遺産

大正、昭和、そして現代

松葉一清
KAZUKIYO MATSUBA

世界のどの大都市もそうだが、ファッションの狂熱が、ストリートを覆っている。イメージがなにものにも優先し、どこもかしこもが、世界ブランドの進出でわきたっている。そこでどうするか、浮足立たずに現実の都市の文脈の中で、自作に確かな像を結ばせる。意欲的なのが、青山・表参道を舞台に最新作を発表する日本の建築家たちだ。ともすれば虚像に走りがちなファッションブティックが主舞台だけに、建築家としての存在意義を維持するためにも、努力は怠れない。

安藤忠雄が「表参道ヒルズ」の内なるスロープに、街路の傾斜を採用したのは、その何よりの現れだ。この選択は「同潤会青山アパート」を部品として保存したことよりもはるかに意義があり、来訪者に足裏から都市の実存のイメージを体感させる点で秀逸だ。

安藤の手がけた商業施設は、高松の「STEP」や京都の「TIME'S」など、都市の文脈を踏まえてきた。その姿勢の集大成が表参道の何千万人もが認知してきたスロープであることは、建築家にとっても、街にとっても、そして来訪者にとっても祝福すべきことである。

黒川紀章は「表参道ヒルズ」の向かいに「日本看護協会ビル」を設計した。この作品において黒川は、表参道から渋谷側に建物の胴体をくり抜くことによって、これまでの表参道のそぞろ歩きでは得られなかった、視線の解放を達成した。この形態は黒川が建築に外部と内部を結ぶ「中間領域」を派生させるために繰り返して採用してきたものだ。これもまた都市的な実践の蓄積が、表参道を舞台に活かされたことになる。

伊東豊雄は「TOD'S表参道ビル」において、コンクリートの量塊感で、シンボルともいふべきケヤキの並木の影

絵を表現した。一方、隈研吾の「ONE表参道」は、カラマツの板を壁面に80枚並べる形で、ケヤキへの呼応を試みた。

こうした建築家たちの企てが、ブランドショップに惹かれてやって来る人々に、都市的な豊かさを実感させる効用は大きい。彼らは上質の都市的な体験を経て、目の肥えた東京歩きの達人となり、そして、何度も表参道を訪ね、青山通り界限にも繰り出していくのである。

現時点において、歴史的な視点で、この界限を振り返ってみよう。

その昔、江戸城を登った馬がそこを登り切ると一息ついて水を飲んだという急坂を、飛ぶような速度で自動車が駆け抜けていく。赤坂を背にすると、右手には東宮御所の深い樹林が都市に沈潜し、それが渋谷方向に進むにつれて、外苑の広大な緑につながっていく。左手は、国際色豊かな歓楽街からオフィスビルの谷間にブティックがはめ込まれた街並みへと展開していく。それにしても、青山通りの自動車交通のベクトルは、なんと気ぜわしく、かつ、ぶしつけなのかと改めて認識させられる。

しかし、1960年代の東京は、これをオリンピックの副産物として選択した。22mというからもともと狭くはなかった青山通りは、1964年のオリンピックを機に40mにまで拡幅された。国立競技場、代々木の体育館[*]など、競技施設の間を結ぶ計画道路を、海外からの来訪者に見せる選択としては良かったかも知れない。だが、正直、この40m道路を歩行者レベルのヒューマンスケールに落とし込むのは、かなりの難事であった。

それでも、結論から記すなら、それ

まつば・かずきよ——建築評論家/1953年生まれ。京都大学建築学科卒業。
主な著書：『アンドウ 安藤忠雄・建築家の発想と仕事』（講談社 1995）、『帝都復興せり！「建築の東京」を歩く1986-1997』（朝日文庫 1997）、『パリの奇跡 都市と建築の最新案内』（朝日文庫 1998）、『モール、コンビニ、ソーホー デジタル化がもたらす都市のポピュリズム』（NTT出版 2002）、『新建築ウォッチング2003-04 TOKYO EDGE』（朝日新聞社 2004）など。

は見事に達成されたといつてよい。その成功はひとえに表参道のおかげである。明治大帝の崩御、明治神宮の創設という、大正の国家的な都市造営の蓄積が、現代の創造者たちに舞台を提供し、昭和の道路拡幅がもたらした難儀を救済して見せた。

やはり、「コープオリンピア」（1965年）を挙げないわけにはいくまい。今でいうディベロッパー「東京コープ」の経営者・宮田慶三郎が手掛けたこの集合住宅は、600㎡に迫る床面積の住戸まであり、まさにオリンピックを機に国際都市を目指す東京にふさわしい都市型居住施設であった。この住宅のステイタスが明らかに青山・表参道一帯のイメージアップに寄与した。対比的に記すなら、50㎡にも満たない住戸の「同潤会青山アパート」（1927年）は、ツタのはった外観で街に大きな貢献をしたが、街の底力を担ったのは間違いなく「コープオリンピア」だったといえるだろう。

それを北の極限とするなら、南側の軸線の縁には「フロム・ファースト」（1975年）が存在した。影のある中庭、幾何立体を組み合わせたソリッドな空間の仕立て。それまでの商業施設とは一線を画した落ち着いた佇まいは、青山・表参道における商業施設のその後の在り方の1つの指標となった。プロデューサー・浜野安宏の面目躍如の名作である。

この2つの南北の極を出発点に表参道の軸線は秀逸な商業施設を集め、その原宿のイメージの良さが、実態としては茫漠たる青山通りの交差する軸にじわじわと浸透していったのが、青山・表参道のこの40年だったといつてよい。

表参道の軸線をおさらいするなら、



TOD'S表参道ビル ハナエ・モリビル 日本看護協会ビル コープオリンピア

「ハナエ・モリビル」（1978年）の出現も特記できよう。丹下健三の設計によるこのビルは、表通りから少し奥まった位置にミラーガラスの外壁を構え、小ぶりながらも、そのままマンハッタンに配しても通用する水準のモダニズムの空間を出現させた。ファッション領域を超えて日本社会の女性のリーダー役の森英恵がここに拠点を構えたのは、ファッションストリートとしての街の位置取りと性格を決定づける出来事だったといえよう。

一方、青山通りの軸線では「VAN」の役割を忘れるわけにはいくまい。「ハナエ・モリ」と比肩する石津謙介の青山3丁目での開業（1963年）は、オリンピックを機に変貌する青山通りの、その後の歴史をイメージの上で先取りするものだった。

幅40mという都市骨格の青山通り、歴史的にも東京を象徴する表参道、そこに「コープオリンピア」、「ハナエ・モリビル」、「フロム・ファースト」などいずれも建築史上に名をとどめる名作が出現し、今日の布石は打たれた。あとは世界クラスの建築家が参画することによって、街は世界でも最先端の

場としての地歩を固めていったのである。

その過程において、ファッションブランドの果たした役割は大きい。「VAN」の貢献を再考する時、メディアのつくりあげた虚像（批判的な側面だけではない）の大きさに思い当たるだろう。実態として浜野や丹下がつくったハードは存在したが、それを青山通り全体の底上げに寄与させたのは、マスメディアのつくりあげた流行の価値観に、大衆が疑いを抱かなかった昭和後期の世相があったればこそだった。

賑わいや界隈性が、浜野たちによって本格的に持ち込まれはしたが、それをメディアが増幅した側面は大きかった。そのような現在までに至る過程は、都市づくりの今後に大きな教訓と示唆を与えるものといえよう。

歴史に照らすなら、都市骨格の拡大という現象は19世紀ウィーンに存在した。中世以来の都心を取り巻いていた防御土塁を撤去して、環状道路（リンクシュトラッセ）とした経緯である。当時、カミロ・ジッテをはじめ、近代の都市論者たちは、明確な移動ベクト

ルを持つ新時代の交通手段（路面電車や自動車）が、そぞろ歩きの歩行者を脅かすことを危惧する論考を残している。まさに青山通りと同じである。

ジッテはそれに対して、建築物に囲われた安心できる場としての広場の効用を訴え、茫漠とした巨大建築の前庭には、人々が安心して通行できる独立した回廊を増設するよう提案している。そうしないと近代交通手段のための道路は視線を拡散させるだけで、都市の利用者としての市民の不安をかきたててしまうというわけだ。

表参道では、あのケヤキが視線を拡散させず、安藤忠雄や黒川紀章、伊東豊雄、隈研吾、そして「ルイ・ヴィトン表参道」を手掛けた青木淳らが持ち込んだ新たな景観にソフトランディングさせる役割を果たしてくれた。私たちは、メディア社会が存在しなかった時代の都市づくりの先人に感謝するしかないのかもしれない。*

[*] 国立屋内総合競技場・附属体育館



青山・表参道周辺

「素晴らしい表参道」を守る

松井誠一
SEIICHI MATSUI

「特集3」 デザインする街 2



明治神宮

この街の発展が始まったのは33年前の昭和48年である。当時ここで商売をしていた7軒が発起人になり「原宿シャンゼリゼ会」を設立し、昭和60年に法人化した。そして平成11年、現在の「原宿表参道櫛会」と名称を変更した。明治神宮の表参道であること、ケヤキがシンボルであるという原点に立ち戻った決断だった。現在の会員数は215社、加盟店800店舗である。

街が急激に変化してきたのはここ数年で、近年の変化には目をみはるものがある。その中で特徴的なことは、ヨーロッパ、アメリカの大手ブランドを持つ資本グループが当地に土地を取得し自社ビルを建設、店舗のみならずアジアでの拠点を表参道に移すケースが相次いでいる。これは原宿、表参道の



人で賑わう表参道



掃除隊 (写真: 原宿表参道櫛会)

環境、景観、そして何よりも“明治神宮”の存在によるだろう。つまり、表参道は日本的なものと極めてモダンなものが密接に絡み合っていて融合し、独特の雰囲気を出している。表参道の価値はそこにある。そのような他にはない街の魅力・個性を守っていかなければならない。「櫛会」では、長い間、地道に活動を続けてきたが、表参道に進出してきた方たちも、街を守るための努力と協力は惜しまない。一般的には大手のヨーロッパブランドなどは地域の活動にはあまり関心がないと聞かすが、ここでは快く協力していただいている。誰もが自分たちの街は自分たちで守る、あるいは整備しなければならぬことを自覚しているからだ。



表参道 青山方面を見る

まつい・せいいち—商店街振興組合原宿表参道櫛会 理事長/1951年生まれ。学生時代から実家の「原宿八角亭」(焼き肉レストラン)を手伝う。大学卒業後、一時商社に就職するが、1976年より所有地のビル再開発を手掛ける。同年より「原宿シャンゼリゼ会」理事。1992年、副理事長。2006年より現職。また「原宿表参道元氣祭・スーパーよさこい2006」の実行委員長も務めた。



原宿表参道元氣祭・スーパーよさこい2006

表参道の修景事業 (商業環境・居住環境の整備)

平成5~9年まで、東京都の“表参道修景事業”に参加した。表参道は日本を代表する通りであるため、渋谷区、東京都の協力を得て特別な仕様で整備を行った。そして現在の花崗岩網代張りの石畳やストリートファニチャー、街路灯、ガードレール、電話ボックス、ゴミ箱、街路案内などを完成させた。最終的に「櫛会」は総費用の30%を負担し、その金額はかなりのものだったが、効果は十分あった。例えば最初の構想では、歩道にベンチを置きたかった。しかし法規面でどうしてもクリアできず、ベンチ代わりになる植え込みの柵を開発し、レール状の“プラスバンド”をデザインして設置した。この効果はかなり大きかった。来街者が並んで腰を掛けている光景は、表参道の雰囲気をより和やかなものになっている。

美化推進、及び美化啓蒙活動

当会が一番力を入れているのは“美しい環境を維持すること”である。その代表が掃除隊で、月曜日から土曜日までは、有志が持ち回りで表参道、明治通りの定期清掃を行っている。オシャレなユニフォーム姿で街を清掃する光景を目の前で見ただくことによって、ゴミを捨てないマナーの啓蒙になることも期待している。特に、イベントの後などは掃除隊がデモ行進のよ



ベンチ代わりの“プラスバンド”

うなかたちで通りを綺麗に清掃するやり方を繰り返し続けている。

この他、銀行店舗の路面出店への自粛もお願いし、街並み美化の一環として貢献していただいている。オフィス街のようにシャッターが下りて殺風景な街並みにならない配慮も重要である。また、街頭放送によるキャッチセールスの締め出し、悪質な呼び込み、露店商の排除にも対策を講じ、効果を上げている。

緑化推進

明治神宮の造営に伴い、大正10年、参道に4、50cmのケヤキの苗木が201本植えられた。しかし東京大空襲で13本を残して大半を焼失。それを昭和24~26年に何回かに分けて補植したが、今のケヤキ並木である。その後、台風などによる倒壊で、戦前からのケヤキは11本を残すのみ。樹齢86年以上になる。その他は樹齢60年で、現在は163本のケヤキと5本のイチョウが表参道の象徴になっている。このシンボルを守るために、1981年から順次、健康診断を行ってきたが、かなりの老朽化や幹の空洞化が目立ってきたため、今年「櫛会」で樹木医によるケヤキの健康診断と応急手当てを全エリアで実施した。費用負担は大きいですが、この診断結果を基に都に土壌改良などの保全策を申請したいと考えている。



表参道ヒルズ エントランス周辺

おわりに

表参道はプラスバンドに腰を掛けて休むことができ、何よりも木陰になる…、そこが他の街とは全く違うところである。つまりストリートではなくアベニューなのだ。アベニューは並木がなければ成り立たない。そして並木道であるが故に散歩する人も観光客も、歩道幅8mのアベニューでゆっくりウインドーショッピングが楽しめる。外国の一流ブランドはそういう“街の雰囲気”が、自社のブランドイメージとマッチ

すると考えているようだ。

来街者が一番多かったのは本年5月、天気のいい日は1日20万人に達した。従来にも増して人が出る街になったが、人があってもゴミが少なく、美しいのがこの街の特徴である。夏の“元氣祭・スーパーよさこい”が大盛況に終わった。歴史のあるハロウィーンパレードもやってくる。われわれは今後も、地元の人々も来街者も喜ぶような仕掛けを用意し、更に魅力のある街にしていきたい。*

ストリート派の行動哲学

「FROM・FIRST」発想から35年

浜野安宏
YASUHIRO HAMANO

「特集3」 デザインする街 2



みゆき通り 手前はFROM・ファースト。奥はCOLLEZIONE



青山通り



キャットストリート 左はhhstyle.com



みゆき通り

“ストリート派”と自称してきた。ライフスタイル・プロデューサーとしてストリートづくりを仕掛けてきた。しかしながら、こんな金にならない存在の薄い職業はない。しかも一般的には人にはプロジェクトの重要性を唱え実現へ奔走してきた人間よりも、建築家やデザイナーの作品としてしか見えないのである。

街づくりを企業やファンドの利益追求、建築家の作品表現の手段と考えるところに、実は大きな時代錯誤があることに気付くべきである。街は利益追求や自己表現の舞台である前に、人間の場所、市民の街路であり、歴史記憶の継承であるべきなのだ。

しかし私の、35年前に「FROM・ファースト」によって仕掛けた布石は今や、青山通りの国家規模の景観改造へとつながり、世界の注目する広域界隈となってきた。そして表参道地下鉄駅上、青山通りと骨董通りの交わる辺りの大規模敷地（一部、旧「紀ノ国屋」跡地）を所有する事業主から商業の総合的なプロデューサーとして指名されて

はまの・やすひろ—ライフスタイル・プロデューサー、浜野総合研究所 代表/1941年生まれ。多摩美術大学客員教授、NPO法人渋谷・青山景観整備機構 専務理事。また、フライフィッシングの世界でも著名。
主な仕事：FROM・ファースト（1975）、東急ハンズ（1976）、QFRONT（1999）、軽井沢クリークガーデン（2005）、Q-AX（2006）など。
主な著書：『建築プロデューサー』（鹿島出版会 2000）、『新質素革命』（出窓社 2003）、『人があつまる ストリート派宣言 界隈生活地棲息都市』（ノア出版 2005）、『TRAVELING WISDOM』（DVD、OmniQ Gallery 2005）など。

おり、いよいよこの青山・表参道のランドマークとも言うべきプロジェクトの建設に取り掛かるところである。

“Work, live with joy” から “Beauty, fit with joy” へ

「FROM・ファースト」を計画し始めた頃、第一次のオイルショックに見舞われた。もともと私たちのような知識集約、創造集約型の人間には住みやすい環境をつくるために計画されたビルであり、私たちもその中に入る予定だった。24時間いつでも働けて、遊べて、生活することのできるビルだった。しかし、建築費の暴騰と近隣の要求で1層分がカットされたことから、高級品にするしかなく、将来性があるファッションのブティック、オフィス、SOHOにすることとなった。

私は、東京都に相談し、「FROM・ファースト」のある、みゆき通りに街路樹を植える運動をし、それが今日見事に育っている。更に1989年には通りを挟んだ隣に「COLLEZIONE」をプロデュースし、みゆき通りを高品位なストリートとして決定付けた。

“24時間快適な住、遊、働の高品位環境をつくる”、この「FROM・ファースト」が持たされた決定的な使命が、今日の青山・表参道の決定的な特質となってきている。同時に青山・表参道はファッション、美容、健康に関する関心が高い街として育ってきた。どちらかというとアパレルのファッションやそのブランドに関心が高いが、美容、エステ、フィットネス、ウエディングなどのフラッグシップ立地として欠かせない存在になりつつある。

現在計画中の「紀ノ国屋」が地下に入るビルは、まさしく青山30年の変遷を決定的なものにするだろう。“Beauty, fit with joy”の時代がくる。“Work, live

with joy”を大声で叫ばなければ、近代都市の潮流は職場と住宅と商店街などにセグリゲート（隔離）しようとしていた。あの頃、包括的な「生活地を！」と叫ぶ一介の青年の声を聞いたのは、釧路の太平洋炭鉱が新規に始めた事業会社・太平洋興発だけであった。それが今では日本有数のハイエンド「生活地」へと変貌を遂げた。

竹下通り、キャットストリート、 みゆき通り、裏青山、青山通り

私はナンパな大学時代、綺麗なおばさんの乗ろうとするタクシーに強引に乗り込み、「しようがない子ね」と怒られながら着いた原宿駅前。そこに唯一そびえていた第一生命アパートに憧れ、これをオフィス兼住居にする。見栄を張っても生活は苦しかった。いったん六本木に事務所を移していたが、現在、私が「パタゴニア」や「hhstyle.com」を仕掛けて素晴らしいストリートに変貌したキャットストリートにもオフィスを構えた。成城に住んだが都心へ舞い戻り、みゆき通りに近い南青山第一マンションに住んで、「FROM・ファースト」をつくった。裏青山に土地を買い、「オムニクォーター」を自分で建て、その上に住み、1・2階を「TSUMORICHISATO」に貸して、地下を浜野総合研究所とティーム・ハマノのオフィスにしている。京都生まれの私だが、“終の仕事場”は青山になるだろう。

「フィガロ」に頼んで「FROM・ファースト」の1階角にはカフェをつくってもらった。高級ブランドが、表参道や青山からカフェとレストラン、映画館などを存在不可能に追いやった。私の大切な仕事は、ストリートにカフェと映画館など楽しい街に不可欠な生活を、NPO活動を通じて取り戻すことになるだろう。*



キャットストリート

表参道らしさを継承した ルイ・ヴィトン表参道

青木 淳
JUN AOKI

「特集3」 デザインする街 2

どの街にも、その街らしさというものがある。その街らしさがあるので、どの街も違う街になる。どこまで行っても同じ空気の、のっぺらぼうの都市よりも、いろいろな違いを持った街が集まって出来ている都市の方が楽しい。

表参道にも、表参道らしさというものがある。というより、表参道は他の東京の街と比べても、際立って個性が強い街だ。車道が広い。歩道も広い。その車道と歩道の間には、大きなケヤキの美しい並木がある。そんなブルバールのある街は、東京では珍しい。それから、商業の多い街なのに、生活がある。大通りを1本入ると住宅街。ちょっと前までは、大通りに面して、長い距離にわたって、緑に包まれた「同潤会青山アパート」が建っていた。人が住んでいる。その生活と溶け込むように、でも他の街からそのためにわざわざここに来るようなお店がある。こうした特徴も、東京では珍しい。表参道以外では、代官山と広尾くらいだろうか。

こういうその街らしさを引き継ぐよ

うに、新しい建物を設計する。「ルイ・ヴィトン表参道」は、特にこの街に生活があるということを引き継ごうとした建物だ。目の前には、まだ「同潤会青山アパート」が建っていた。住宅なので、控えめなスケールを持っている。窓は大きくないし、階段室が建物を小割りに分節している。建物の高さも低く、一つひとつの住棟も小ぶり。それに対して、一般的に商業的な建物に求められるのは、なるべく大きく見えるようにつくることだ。実際よりも大きく見せるために、例えば、ファサードに分節を加えず、大きな一体的な面にする。商業的な建物が向かう方向は、住宅が向かう方向と逆と言ってもいい。「ルイ・ヴィトン表参道」は、「同潤会青山アパート」の住棟が持つスケール感を引き継ごうとしている。元々トランクづくりから始まったルイ・ヴィトンである。まるで、そのトランクをランダムに積み重ねて出来たようにも見えるように、一体の建物が分節されている。トランクの積み重ねというのは、何もファサードの表現だけにはとどま

あおき・じゅん—建築家・青木淳建築計画事務所／1956年生まれ。1982年、東京大学大学院修了。1991年、青木淳建築計画事務所設立。個人宅、公共建築からファッションブティックまで多方面で活躍。2000年に公開設計競技最優秀賞を受賞した青森県立美術館が2006年開館。近著：『JUN AOKI COMPLETE WORKS 1：1991-2004』（INAX出版 2004）、『JUN AOKI COMPLETE WORKS 2：AOMORI MUSEUM OF ART』（INAX出版 2006）。

らない。建物全体の空間構成にも行き渡っている。トランクのような直方体の空間に立つと、その上下に次のトランク空間が見える。場所によっては、トランクであることに由来する内装になっている。7階の廊下、トイレ。ここでは、トランクの中が天地なく綺麗な裏地がまわって出来ているように、床、壁、天井の区別なく、全面が3種の寄せ木で出来たパターンで覆われている。

ファサードの表面は、ケヤキの枝葉が持つ繊細さに合わせた、ステンレス製の細かいメタル・メッシュで出来ている。その裏に、ローズがかった発色の鏡面ステンレスのパネル。鏡面パネルに映っているのは、手前のメタル・メッシュであり、またもっと手前のケヤキであり、その外光の明るさだ。メタル・メッシュの裏が手前の外光と同じ明るさになる。本当のメタル・メッシュとそこに映った虚像のメタル・メッシュが重なり合って、柔らかく繊細なモアレをつくる。その色彩は鏡面の色彩のおかげで、ローズがかった暖かいものになる。

建物の中も、一体の大空間ではない。こぢんまりとした、と同時にゆったりした大きさの直方体空間が立体的に組み合わされている。同潤会のアパートの床や壁を抜いてつくったような、立体的編目の空間。

ある街のその街らしさは、ひと言で言えない。人によってその捕まえ方は違う。違うから、どこかでその街らしさを引き継ぎながらも、単一な風景にならず、豊かな多様性が生まれる。そして、その多様性の上に、またひと言で言えないその街らしさが生まれる。街のそんな創造的継承の、1つの部分をつくること。それが私たち建築家に求められていることのようにだ。*

Show 商空間

ルイ・ヴィトン表参道

設計：青木淳建築計画事務所



5階テラス



7階LVホール

Show 商空間

■建築概要
名称：ルイ・ヴィトン表参道
所在地：東京都渋谷区神宮前5-7-5
設計・監理：青木淳建築計画事務所（本体、外装、一部内装）
施工：清水建設
敷地面積：594.82m²
建築面積：512.89m²
延床面積：3,258.73m²
規模：地下2階、地上8階
構造：S造、一部SRC造
工期：2001.4～2002.8



表参道側外観夕景（LVホールとも写真：DAICI ANO）



7階トイレ 洗面コーナー（テラスとも写真：横瀬博一）



同潤会青山アパート（写真：原宿表参道櫛会）

百年を見据えた表参道ヒルズ その開発コンセプト

山本和彦
KAZUHIKO YAMAMOTO

「特集3」 デザインする街 2

関東大震災の復興住宅として、1927年につくられた「同潤会青山アパート」は老朽化が進んでおり、地権者の間では1970年頃から建て替えが語られ、「再開発は避けられない」と意見は一致していた。問題はどのような建物に建て替えるかであった。

バブルになって、挫折しかかった再開発をディベロッパーとして引き受ける時に検討すべき大きな課題が3つあった。第1にケヤキ並木と同様、表参道の象徴ともいえる「同潤会青山アパート」の歴史性にどう応えるか。第2に「静かな住環境を確保したい」、否、「資産価値を上げて商業的賑わいをつくってほしい」、「安定した家賃収入が欲しい」、などなどの多岐にわたる地権者のコンセンサスを得ること。第3に事業の採算

性を永続的に確保することであった。歴史の継承にも2つの側面があった。1つは明治神宮の参道としての歴史であり、神宮の森からの緑の継承である。この森には大正時代に全国から樹木の寄付を募り、それを植生の変化を計算して植え、150年かけて元々の自然植生である常緑広葉樹林を再現しようとする壮大な計画に基づく人工林なのである。ケヤキ並木は、その森に連なるという長期的歴史を意識すること。もう一つは「キティランド」、「セントラルアパート」、「コープオリンピア」、「ラフォーレ原宿」、DCブランド、裏原宿のストリートファッション、現在のスーパーブランドショップの集積、というトレンド先端文化の発信地としての短・中期的歴史である。

このような認識の基にこれらの課題にチャレンジしていただく建築家として、安藤忠雄氏に依頼したのが1994年頃だった。それから10年以上にわたって安藤氏には創作と調整に多大なエネルギーを使っていた。地権者との会合にも出席いただき、計画説明、ディスカッション、説得と大変な努力が欠かせなかった。社会から高い評価を得られたこの建築作品と共に深く感謝したい。戦災で焼け野原になり、その後の高度経済成長の中で雑然と急増した東京の街並みの中で、この表参道のケヤキ並木は“残すべき都市の文脈”といえる数少ない都市資産と考えられる。このケ

ヤキ並木を尊重して建物の高さをどう抑えるかが最大のチャレンジであった。地上の高さは5層、ほぼ20mとケヤキ並木の高さに揃え、上の2層（一部3層）を住宅に当て、緑と静かな住環境を確保した。その代わりに、地下は6層・30mも掘り下げ、機械室・駐車場には下3層を割り振り、残りの地下3層、地上3層の計6層を事業性を確保する商業施設にした。6層という商業空間のハンディを乗り越えるために、中央に吹抜けを配置し、各層を表参道と同じ勾配のスロープでスパイラル状につなぎ、満遍なく人々が行き渡れるような解を見出した。

また、表参道沿いに250mも続くファサードについては、青山通り側に同潤会の1棟を再現し、歴史の記憶をとどめると共に、反対側の200mは骨格としてのシンプルな表現にとどめた。表参道は比較的間口の狭い敷地に有名建築家も参加して、個性ある優れた建物が建ち並び、世界に類例の無いような魅力的な街並みを形成している。このような今後も変化し続ける建物、路地空間に対し、「表参道ヒルズ」では、店の中身は入れ替わるものの、建物は100年以上変わらない骨格づくりを指向したのである。

その比較的均質なファサードに、パブリックアートとしての動く映像の壁画を備え付け、情報、アートの発信の意味も持たせている。しかも内部の吹抜け空間は、その大階段、地下3階の多目的スペースと相まってさまざまな環境演出ができるようになっている。「メディアシップ」と称する情報を発信し続ける役割を果たしたのである。今後この「表参道ヒルズ」が短・中・長期にわたってケヤキ並木と共に表参道の象徴であり続けることを願っている。*



表参道ヒルズ 内観

暮らしを

デザインする

imiai colore

設計：鈴木エドワード建築設計事務所

静謐ななごみ 鈴木エドワード EDWARD SUZUKI

「イマイ コローレ」は話題の「表参道ヒルズ」に登場した贅沢なトータルビューティーサロンである。

延面積424m²、ヒルズ内店舗としては圧倒的な広さの中、カラーリングの「Colore（コローレ）」、エステ「Suite（スイート）」、フラワーショップ「Odette（オデット）」の機能が盛り込まれている。

コンセプトは「静謐ななごみ」。リラクゼーションの中で、心身ともに再生するための特別な場所、大都市のカオスと対極、静謐な空間である。

フラワーショップが入口左、その左手奥は光のウォーターフォール、そして中心部はカラーリングスペース、右手に完全防音（ボックス・イン・ボックス）のエステスペースとした。

幅20m、高さ3mのゆらぎのウォーターフォールで五感に訴える静謐をつくった。モールドグラスを約3度傾け、上部48本のノズルから水を噴射、背面ライトアップで人の身体リズムに呼応するかのようにつらつら流れ落ちる水が浮かぶ。すべてのイスは滝に向かって位置する。ミラーは存在感をなくし、鏡面仕上げステンレスを直接床に埋め込んだ。

全体的な色合いのトーンを落とし、光と影のコントラストを強調、足を踏み入ると、生命の源である植物、水、水音、光、これらが五感に静かに語りかける。

賑わいの表参道ヒルズの中で、ここだけは時間が止まる静謐さを提供できたのではないかと思う。*

すずき・えどわーど——建築家・鈴木エドワード建築設計事務所／1947年生まれ。1975年、ハーバード大学大学院アーバンデザイン建築学修士修了。1977年、鈴木エドワード建築設計事務所設立。主な作品：東京倶楽部（1992）、ムバタ・ロッジ（1992）、さいたま新都心駅および東西自由通路（2000）など。



暮らしをデザインする



■建築概要
名称：イマイ コローレ
所在地：東京都渋谷区神宮前4-12-10
設計：鈴木エドワード建築設計事務所
施工：イズモブランドニング
延面積：423.99m²

上——カラーリングスペースからウォーターフォールを見る。すべてのカラー・セットスペースからウォーターフォールを眺めることができる。モールドグラスには波形を表面に施しており、水のゆらぎをつくり出している。タイにて特別製作中——シャンプスペースを見る。サロン滞在中の数時間をストレスなく過ごせるよう、特別にデザインしたイス。さまざまな工夫を細部にわたり施している下——入口から店舗内部を見る。入口にフラワーショップを設けることで、サロン利用者以外の客も自然に足を踏み入れることができる